

# ‘Explicit Content’

## ーPMRC とレコードラベリング問題にみる現代アメリカ社会の階級関係ー

立林 奈々子

### 目次

#### はじめに

- (1) レコードラベリングの起こり
- (2) 先行研究とその問題点

#### 1. 米国の階級

#### 2. 「ナショナル・クラス」エリートとしての PMRC

- (1) 全国的なネットワークとシンボル操作
- (2) 専門家階級の合理主義と自由主義
- (3) 「ナショナル・クラス」の十字軍的性格と伝統的な中産階級的道德観
- (4) 無階級社会の神話の信奉

#### 3. 州の主権：「ローカル・ミドル・クラス」

- (1) 市場への影響—冷却効果（チリング・イフェクト）
- (2) 法的処罰
- デッド・ケネディーズ『フランケンクライスト』事件
- (3) 規制立法の動き
- (4) 法執行者の圧力

#### おわりに

#### はじめに

#### (1) レコードラベリングの起こり

「保護者へ警告、過激な表現内容を含む」と記され、CD やレコードに貼付された小さな白黒のラベルは、1990 年 3 月から、全米レコード協会（以降、RIAA）によって採用されている。これは、レコードや CD が何らかの過激な表現（‘Explicit Content’）を含んでいることを幼い子供を持つ保護者に警告するための表示であり、ロックやラップを中心とした米国のポピュラー音楽に親しむ人びとには、日本でも見慣れたものとなっている。そのデザインを模した衣類やポスターのような商品も見られることから分かるように、それは今日ではさほど深刻に受け取られてはいない（図 1）。むしろ、一部のアーティストやその音楽の愛好者のあいだでは、大胆さや悪ぶる態度を象徴するものとして、ラベルが CD につくことを好む傾向さえあるように思われる。

しかし 1985 年に首都ワシントンで結成されたペアレンツ・ミュージック・リソース・センター

（以降、PMRC）によって、初めてレコード業界におけるレーティング及びラベリング制度の導入が提案された当時には、その是非をめぐって米国内を巻き込む数年に亘る激しい論争が起きた。それ以前には、放送業界においては、エルヴィス・プレスリーの下半身がテレビ局による放送自粛の対象となったり、英国のロックバンド、ローリング・ストーンズが米国のテレビ番組に出演した際に性的な含みのある歌詞を変えて歌うように要請されたりする事例があった一方で、レコードの販売に関してはいかなる規制も存在しなかった。従って、1985 年に PMRC が結成され、今日に至るまで存在するラベルの確立に貢献したことは、ロックミュージックの歴史において 1 つの重要な転換期として記憶されている<sup>1</sup>。

1985 年春にたった 4 人の既婚女性が草創したばかりの新しく小さな組織であった PMRC のはたらかけによって、レコードラベリングの導入をめぐる議論は瞬く間に全国的な注目を集めた。PMRC がそれほど世間の関心を引いた大きな理由の 1 つは、創設メンバーが単なる主婦の集まりではなく、「ワシントンの妻たち」（“Washington Wives”）だったためである<sup>2</sup>。彼女たちの夫はみな、ワシントンの政界、実業界の名高いエリートだった。幅広い広報活動を通じて世間で最もよく顔を知られたメンバーとなったメアリー・エリザベス・「ティッパー」・ゴアは、当時のテネシー州選出の民主党上院議員アルバート・ゴアの妻であった（ティッパーは、もともと愛称だが、文筆活動など公的活動もティッパー・ゴアの名前で行なっ

<sup>1</sup> Glenn C. Altschuler, *All Shook Up: How Rock 'n' Roll Changed America* (New York: Oxford University Press, 2003), pp. 87-93; John Covach, *What's That Sound?: An Introduction to Rock and its History* (New York: W.W. Norton & Company, 2006), pp. 174-5, 498-9.

<sup>2</sup> 結成の契機から 9 月 19 日に行なわれた上院公聴会終了までの間の PMRC の活動の経緯は、Tipper Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society* (Nashville: Abingdon Press, 1987), chapter 1 を参照。「ワシントンの妻たち」という呼称についてゴアは、ミュージシャンであり、反検閲活動家のフランク・ザッパによるあてこすり定着したものと説明している。

ている)。そして、PMRCの会長はワシントンの元市議会議員ジョン・ネヴィウスの妻サリーが、副会長はレーガン政権で財務長官を務めていたジェームズ・ベイカーの妻スーザンが、財務担当はワシントンの大手建設会社のCEOであるレイモンド・ハウワーの妻パムが担った。彼女たちはPMRCの活動のために、夫の名前や人脈を頼ることに躊躇がなく、メディアは「ワシントンの妻たち」が派手で粗暴な言動のミュージシャンと巨額の富を動かす音楽業界を相手取って活動するさまに話題性を見出した。

PMRCの設立のきっかけについては、常にティッパー・ゴアの怒りに満ちた経験談が引用される。彼女は1984年12月に、11歳の娘の希望に応じて、その年大ヒットを記録していた黒人ロックミュージシャン、プリンスのアルバム『パープル・レイン』を購入した。このレコードは同年に公開された同名映画のサウンドトラックで、プリンスは其中でも主役を務めており、高い評価を得ていたという。ところがレコードを再生してみると、「耳を疑うような破廉恥な歌詞」の曲が収録されており、そうとは知らずにこのような作品を買わされたことに、ゴアは大いに腹を立てた。このことをきっかけに、子供たちのお気に入りの音楽チャンネルMTV(1980年代に登場し人気を博したミュージックビデオ専門局)などを注意して観ていると、プリンスに限らず、流行のロックミュージックのなかには過激な性描写や恐るべき暴力表現、ドラッグやアルコールの不適切な称賛といった幼い子供にとって有害なメッセージに満ちているものが少なからずあることに気づかされた。母親として同様の問題意識を抱えていたベイカーと彼女の2人の友人にゴアが加わり、4人は「歌詞が性的に過激であったり、過剰に暴力的であったり、あるいは薬物やアルコールの濫用を賛美したりするような昨今の由々しき風潮について、情報提供を行ない、親である人々を啓発すると共に、音楽業界にそのような表現の自主規制を促す」<sup>3</sup> 目的でPMRCを結成した。この憂慮する母親たちは、10代の自殺や妊娠の増加といった米国社会の病理の重要な一因は日常に溢れるロックミュージックの

歌詞やビデオにあるとし、「子供救済十字軍」<sup>4</sup> として立ち上がったのだった。

PMRCは、レコード業界に一律のレーティング基準を設置し、その評価に基づいてすべてのレコードを評価し、必要と判断された作品には統一の警告ラベルを貼付することを強く要求した。その活動は、1985年9月19日にアメリカ上院通商・科学・交通委員会で執り行なわれた公聴会で1つの頂点に達する。公聴会には、200人のメディア関係者と400人の見物人が詰めかけ、「議会史上もっとも広く世に知られたメディアイベント」<sup>5</sup> となった。



図1) 警告ラベルのデザインを利用した衣類の例。(出典：

<http://www.hottopic.com/hottopic/Guys/Hoodies/PopCultureHoodies/Goodie+Two+Sleeves+Parental+Advisory+Pullover+Hoodie-920301.jsp> 米国のショッピングモールに店舗を多く持つ、若者向けのファッション小売店「ホット・トピック」のオンライン・ストアから取得。)

## (2) 先行研究とその問題点

音楽業界に留まらず、全米の関心事となったPMRCのキャンペーンは、1980年代当時から今日

<sup>3</sup> Susan Baker, "Statement of Parents' Music Resource Center," *Record Labeling*, Senate Committee on Commerce, Science, and Transportation, 99th Cong., 1st sess., 1985.

<sup>4</sup> "save-the-children crusade". Lois P. Sheinfeld, "Ratings: The Big Chill," *Film Comments*: 22.3, (May 1986), p. 9. PMRCが自らの判断こそが良識に適ったものであることを疑わず、それによって他者に介入することを、有無を言わず正当化していたことを受けて、Sheinfeldが用いた表現。

<sup>5</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, pp. 32-3; 公聴会の様子については、Dave Marsh, "Sympathy for the Devil," *Village Voice* (October 8<sup>th</sup>, 1985), pp. 9-13; Jay Cocks, "Rock Is a Four-Letter Word," *Time* (September 30<sup>th</sup>, 1985), p.70 を参照。

に至るまで、大別して2つの観点から論じられてきた。1つの議論は、ラベリング制度を合衆国憲法修正条項第1条に基づく言論の自由をめぐる問題として取り上げるものである。ラベルがミュージシャンの自由な表現を抑圧するものだという主張は、ミュージシャンやリベラルなジャーナリストを始めとするラベリング制度の反対者の正当性の最も重要な根拠であった。ラベリング制度は検閲であると説くことで、これらの人びとは権力による行動の限定に対する米国人の嫌悪に訴え、米国らしい自由を守るべきだと主張した<sup>6</sup>。このような議論のため、ラベリング問題は音楽の作り手である表現者と権威を有する検閲者との闘いであったという見方が現在でも強い。

しかしながら、このようにラベリングにまつわる議論を検閲と言論の自由の問題と規定してしまうと、検閲者の抑圧の犠牲になったり、そのことに果敢に抵抗したりするアーティストの英雄的な姿や闘いの側面ばかりが強調されることになる。それによってラベリング問題が20世紀の合衆国の様々な市民的自由をめぐる事件に連なる、米国らしい事例ではあるものの、どこかありきたりな出来事として説明されるだけでなく、この問題に関わる人びとを限定してしまう。つまり、このような議論は、音楽の聴き手や買い手、売り手などの存在を歴史の語りから排除してしまいがちになるという問題を含んでいる。

いまひとつの議論は、PMRCをレーガン政権期における保守勢力の隆盛という文脈の中に位置づけ、保守対リベラルというイデオロギー対立の問題として論じるものである。こうした議論の背景には、1980年代から90年代にかけての米国国内の分裂は、たとえば樋口映美が人種や移民文化、ジェンダーに関わる考え方を通じて「アメリカとは何か」を見極めようとする戦いだと定義する、いわゆる文化戦争がある<sup>7</sup>。レーガン革命によっ

て米国政治の舞台で盛り返しを見せた保守主義と、多元主義を奉じながらまとまりを欠くりベラリズムという2つの思想の間で、米国社会が二分されているという見方である。60年代の公民権運動や対抗文化の盛り上がりと、それを受けて70年代に広まった権利革命によって、大きな文化的変容を経験した米国に対する保守勢力の揺り戻しは、左右の深いイデオロギー対立を招いた。この見方によると、ラベリングは自由になりすぎた音楽表現を牽制しようとする保守派の人々によって推進されたということになる。

ところが興味深いことに、当時のジャーナリズムやこれまでの研究において、PMRCのイデオロギー的位置づけは明確なものとされていない。ジョン・コヴァックによれば、PMRCは保守に転向したかつてのリベラリストたちの集団であるとされる。他方、PMRCの盛衰の歴史を追い、組織のイデオロギー的分析を行なったクロード・シャスタニエは、PMRCをリベラリストの集団と定義した。そして、公益団体としてのPMRCをその戦略などの観点から研究したマリア・フォンテノとチャド・ハリスは、PMRCは左右のイデオロギーの歩み寄りによって結成されたと論じている<sup>8</sup>。このようなPMRCのイデオロギー的立場の曖昧さは、この組織を保守カリベラルか、といった分析枠組によって考察することの限界を示唆している。

PMRCを右派や左派のいずれか一方に位置づけようとする従来の議論は、いずれもPMRCの異なる性質にそれぞれ焦点を当てたものであり、この組織の一部分を見る分には必ずしも的外れな指摘とは言えまい。このことは、PMRC自体が当時の文化戦争という文脈をよく理解し、均衡をとりながら、左右どちらの陣営にもはたらきかけようとした結果であろう。ティッパ・ゴアはPMRCのメンバーとして以下のように述べている。

私たちは自らの価値観を個人とコミュニティの行動を通じて再度主張すべきなのです。

<sup>6</sup> 典型的な議論としては、Covach, *What's That Sound?*, pp. 498-9; Dave Marsh, *50 Ways to Fight against Censorship* (New York: Thunder's Mouth Press, 1991); Eric Nuzum, *Parental Advisory: Music Censorship in America* (New York: HarperCollins, 2001)などが挙げられる。そのほか、映画作品として *Metal: A Headbanger's Journey*, Dir. Sam Dunn, Seville Pictures, 2005 も参照。

<sup>7</sup> 樋口映美「解説：『文化戦争』の概要と定義」、トッド・ギトリン（疋田三良、向井俊二訳）『アメリカの文化戦争

たそがれゆく共通の夢』（彩流社、2001年）所収、278頁。

<sup>8</sup> Covach, *What's That Sound?*, p. 498; Claude Chastagner, "The Parents' Music Resource Center: from Information to Censorship," *Popular Music*: vol.18/2, (Cambridge University Press, 1999), p.186; Maria Fontenot and Chad Harriss, "Building a Better PIG: A Historical Survey of the PMRC and its Tactics," *Media, Culture & Society*, 32(4), (2010), p. 565.

どのような政治的信条を持っている人であろうと、保守派であれ、穏健派であれ、リベラルであれ、みな同様に、もう1度私たちの社会の道徳的基盤を守るために身を捧げる必要があるのです<sup>9</sup>。

この発言には、PMRCが左右のイデオロギー対立を超越し、一体となって「社会の道徳的基盤」の回復、或いは維持を目指そうとしていたことが明確に表現されている。この道徳的基盤は米国の体制を支える中産階級の理念を反映したものである。1980年代半ばの米国社会の文化的分裂という問題は、確かにレコードラベリングをめぐる争いにとっても重要な背景をなすものではある。しかし、PMRCはそうした左右の差異を克服することを目指そうとした集団だと位置づけられなければならない。

本論は、PMRCのメンバーを結びつける絆として、首都ワシントンに拠点を持つ全国規模の権力を有するエリート階級「ナショナル・クラス」<sup>10</sup>としての立場に注目する。それによって、従来のイデオロギーに着目した研究では明らかにされなかったPMRCの組織的一貫性を見出し、その活動の真の意図を探る。また、他の階級との関わり合いを通じてPMRCのキャンペーンがどのような展開を見せ、1990年に現行ラベルの採用に至ったのかを明らかにすることによって、表現の自由という観点からの従来の研究では空白となっていた部分を埋めることを目指す。すなわち、この争いがアーティストや音楽業界と検閲者という限定された対立関係を越えた、米国全体に関わる微妙で捉えにくい階級関係のひとつの表出であったことを示す。第1節では、伝統的な社会経済史とは異なる、政治的、文化的観点から中産階級社会米国の階級を「ナショナル・クラス」、「ローカル・ミドル・クラス」、「ロウアー・クラス」という3つに分類したロバート・H・ウィービーの議論に主に依拠しながら、PMRCやレコードラベリング問題を論じ

ることで米国社会の階級的対立関係が明瞭になる点を説明する。第2節では、「ナショナル・クラス」エリートとしてのPMRCの特質を確認する。第3節では、ロック音楽の表現をめぐる議論が、実際の場面では次第に州の主権を握る「ローカル・ミドル・クラス」に主導権をとられ、レコードラベリング推進運動がPMRCの本来の意図とは異なる形で展開されていった様子を示す。最後に、レコードラベリング問題に見られる支配階級としての「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の緊張関係及び、「ロウアー・クラス」の排除における共犯関係を指摘し、1980年代半ばから1990年代の米国における入り組んだ階級関係を明らかにすることを目指したい。

## 1. 米国の階級

クリストファー・ラッシュは1995年に発表した著作『エリートの反逆 現代民主主義の病い』において、現代アメリカにとって文化的分裂以上に深刻なのは階級的分裂だと述べている。また、彼は当時の米国を分断していた文化戦争も「階級間戦争の一形態」として理解するべきであると主張した。ここで彼が想定している階級とは、米国の政治の基調を決定する専門家や経営者によって形成されるエリート階級のことであり、マルクス主義が規定する労働者階級を搾取する支配者階級とは異なるものであることに留意する必要がある。勤労によって個人の自立と公德を獲得した中産階級の市民同士の平等な関係を国家理念の中枢に据えた民主主義国である米国において、階級という概念は、いくぶん捉えどころがなく、その存在を否定されがちである<sup>11</sup>。

確かに戦後の米国社会は、リザベス・コーエンが鮮やかに描き出したように、大衆消費の巨大なシステムを築き上げ、その中にあらゆる市民を中産階級者として飲みこんでいくことによって階級格差をぼやかし、平等性を強調し、消費行動を自由であることの証とみなすようになった。とはいえ、

<sup>9</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p.12.

<sup>10</sup> Robert H. Wiebe, *Self-Rule: A Cultural History of American Democracy* (Chicago: The University of Chicago Press, 1995)における表現。特に、part. 2以降を参照。ウィービーの提示した米国の三階級構造については、本稿第1節を参照。

<sup>11</sup> クリストファー・ラッシュ（森下伸也訳）『エリートの反逆 現代民主主義の病い』（新曜社、1997年）、24、141頁。ラッシュは、米国のエリート階級は、「たとえ他のあらゆることで一致しないにしても、階級政治を不問に付す点では共通の関心を抱いている」と述べ、とりわけ支配階級が社会の階層制を否定することを指摘している。

20 世紀末の米国社会が無階級社会、あるいは総中産階級社会であるというのは神話に過ぎない<sup>12</sup>。ロバート・H・ウィービによれば、現代の米国には3つの階級が存在する。それは19世紀末から20世紀にかけての産業化と共に、従来の白人成人男子をモデルとする中産階級とそれ以外という二階級社会が徐々に変容し、形成されていった。米国人は自らが自由と平等の理念を担う中産階級者であることを信じ続けていたが、現実には最も権力から遠く不安定な立場の被支配層である下層階級の上に、米国の連邦制の伝統を反映し、全国的な制度や政策に携わる「ナショナル・クラス」、そして地方自治体の事象を扱う「ローカル・ミドル・クラス」という共存、競合関係にある2つの支配階級が生じたのである。「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の2つの支配階級は、20世紀前半には前者が経済政策を決定し、後者が地域ごとに道徳や文化にまつわる政策の決定を下すことで共存していたが、人種問題解決をめぐる連邦政府の強権的介入をきっかけとして、世紀半ばからその関係は変化を遂げていく<sup>13</sup>。

ラッシュが「エリート」と呼ぶ人びとによって構成される「ナショナル・クラス」は、20世紀前半の2度の大戦の勝利と前向きな経済の見通しによって、世紀半ばには「文字通り世界を動かすことができるのだという大いなる自信と共に台頭」した。彼らは、消費にうつつを抜き「プラスチック同然」の浅はかな価値観しか持たない均質化する大衆に進むべき方向性を与えることを自らの使命だと任じ、そのためのシステム作りに励んだ。彼らは個人の権利に重きを置き、先進的な方策によってその権利の拡大を目指した。それに対し、伝統や習慣、習俗に重きを置く「ローカル・ミドル・クラス」は、自らの主導権が奪われ、価

値観を侵害されていると感じ、次第に反発を強めていった。地方共同体では、「ナショナル・クラス」の奉じる個人主義的な民主主義よりも、共同体の伝統や習慣、習俗を重んじ、多数派が何事も決定すべきとする多数派民主主義が主流であった。20世紀後半を通じて、こうした二者の緊張関係は深刻化していき、妥協の余地を失っていった<sup>14</sup>。

緊張の高まりの背景には、1970年代以降の米国の経済不振がある。1980年代は、文化戦争の激化した時代であったと同時に、2桁に上る失業率や大恐慌以来の経済不況といった問題によって自らを中産階級と位置づけていた人々が没落し、社会における格差が拡大した時期でもあった。70年代の景気後退は戦後の豊かな社会にすべての市民を巻き込んでいく「消費者共和国」システムに限界をもたらし、堅固だった中産階級を細らせた<sup>15</sup>。それによって戦後の豊かな社会が作り出した、アメリカ人は一定の文化的、道徳的理念を共有しているという意識も危ういものとなり、「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の相互に対する不信や敵意が募ることとなった。更に、中産階級の衰退と共に、このシステムに当初から内在していた不平等な構造も次第に露わになった。戦後社会は、豊かな白人中産階級が牽引したものであり、彼らは労働者階級と非白人下層階級の人々にはより少ない分け前とより少ない機会しか与えず、公平な競争から締め出していた。ウィービは、「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」が共に、最も弱い立場にある人々を米国の分配政治から締め出していると指摘しているが、70年代の景気後退はその傾向を一層強化することとなった。

1980年代半ばから1990年代にかけて起きたレコードラベリング問題は、こうした曖昧ではあるものの深刻な階級的緊張関係を背景に展開していた。文化戦争という枠組みでは、左右の陣営のイデオロギイ的差異が注目されるため、柔軟性を欠く議論になりがちであるのに対し、階級という視

<sup>12</sup> Lizabeth Cohen, *A Consumers' Republic: The Politics of Mass Consumption in Postwar America* (New York: Vintage Books, 2003). コーエンは、本書において戦後米国社会を「消費者共和国」という枠組で捉え、総中産階級社会米国の理念と、経済成長の停滞と共に明らかにされていた、理想とは異なる階層的な現実を描き出している。戦後米国社会については、特に ch.3 以降を参照。

<sup>13</sup> 三階級モデルが最初に示されるのは、Wiebe, *Self-Rule*. P. 115. 下層階級の没落から徐々に、三階級が形成される様を描いたのは、part 2. 20世紀における「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の関係は、part 3で説明される。

<sup>14</sup> 「ナショナル・クラス」の台頭と「ローカル・ミドル・クラス」の反発については、Wiebe, *Self-Rule*, chapter 5に詳しい。ウィービは本章に「Internal Wars」という象徴的なタイトルを付し、2つの支配階級の緊張関係とその背景を説明する。「ナショナル・クラス」に関する引用は、p. 224。

<sup>15</sup> Cohen, *A Consumers' Republic*, pp. 401, 404-406.

座は、レコードラベリングについてなぜ人々が部分的には結託しながらも、問題の解釈や解決のための方法論については緊張を深めていくのかを明らかにすることを可能にする。とりわけ「ワシントンの妻たち」と呼ばれた PMRC によって提起され全米に広まったレコードの過激さに関する問題が、後に地方共同体で PMRC の意図とは異なる形で共有されていった事実を考えると、レコードラベリング問題を階級という観点から一考することには価値がある。筆者は、戦後米国の豊かな社会を維持する管理体制やエリート文化に対して、下層階級や若者が「過激な表現」とされたロック音楽のような表現方法を通じて異議申し立てを行なった、その文化を決して軽んじるものではない。しかし本稿では下層階級による抵抗ではなく、彼らを共に抑圧しつつも、必ずしも相容れることのなかった「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」に焦点を絞っていることを断っておく。

## 2. 「ナショナル・クラス」エリートとしての PMRC

PMRC の創設メンバーである 4 人の「ワシントンの妻たち」は、先述したように、連邦政治やワシントンの市政、そして全米規模のビジネス界との密接なつながりを有していた。彼女たちは、限られた地方ではなく、全米を対象にレコードラベリング問題を訴えることを目指した。その方法論や主張には、「ナショナル・クラス」エリートの特質を見てとることができる。本節では、4 つの観点から PMRC の「ナショナル・クラス」としての性格を論じる。

### (1) 全国的なネットワークとシンボル操作

第 1 に、「ナショナル・クラス」エリートは、連邦規模のネットワークへのアクセスとそれを利用する特権を有する階級である。彼らは特定の土地やそのしきたりに縛られることなく、自由に移動し、抽象的な概念を議論し、シンボルを操作する<sup>16</sup>。PMRC は、活動初期には首都ワシントンの政治、ビジネス上の人脈を利用した会合で知名度を上げ、活動資金を得るとともに、全国的なメディアを戦略的に利用して世論への働きかけを行なっ

た。メンバーたちは約半年の間に多数のインタビューをこなし、『ニュースウィーク』や『ニューヨーク・タイムズ』、『USA・トゥデイ』といった主要な新聞雑誌のコラムや論説、ラジオ番組で取り上げられた回数は、150 以上に上った。更に、自ら積極的にテレビに出演し、ABC、NBC、CBS の 3 大ネットワーク局に夕刻のニュースで取り上げられるほどの注目を集めることに成功している。そして、全国 PTA や米國小児科学会といった全国規模の専門組織と協力を結び、議会へ圧力をかけ、上院通商・科学・交通委員会での公聴会開催に漕ぎ着けた<sup>17</sup>。

PMRC には、ネットワークへのアクセスがあっただけではなく、その効果的な利用の心得があった。人々の注目を集めるためにロックミュージックといふかねてから道徳的、教育的観点から批判の対象となりやすかったポピュラー文化の一部を「ポルノ・ロック」として象徴的に扱いながら、子が親に何を与えるかを決定する権利や、消費者としての選択権、更には社会の道徳的基盤といった抽象的な問題を提示したのである。彼女たちは、自分たちがどのように振る舞うべきかを計算し、「ワシントンの妻たち」という立場を最大限に利用した<sup>18</sup>。上院通商・科学・交通委員会での公聴会があれば世間の関心を引いたのは、「ワシントンの妻たち」とロックミュージシャンというセレブリティたちの分かりやすい対照性がみられたからであり、口角泡を飛ばしてロック音楽を批判するフロリダ州選出の共和党上院議員ポーラ・ホーキンスのような人物の存在があったからだだった<sup>19</sup>。PMRC は公聴会を、そのようなシンボリックな場として設定したのである。

### (2) 専門家階級の合理主義と自由主義

第 2 に、国家に関わる公的な問題を効率的に処理し、人々の生活を導いていくことができる指導者を自任する専門家階級である「ナショナル・クラス」は、何よりも白人中産階級の自由主義、合理主義、そして進歩主義を重んじる。分析によっ

<sup>17</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, pp. 23-4, 157.

<sup>18</sup> David Zucchino, "Big Brother Meets Twisted Sister," *Rolling Stone* (November 7<sup>th</sup>, 1985), pp. 9-10, 15-7, 62, 64-6.

<sup>19</sup> Irvin Molotsky, "Hearing on Rock Lyrics," *New York Times* (September 20<sup>th</sup>, 1985), C20.

<sup>16</sup> ラッシュ 『エリートの反逆』、44-49、56-57 頁。

て問題の所在を明らかにし、的確な処理によって物事が正しく滞りなく機能する、恣意性や偏見から自由なシステムを作り上げることが彼らの使命と考えられた。革新主義時代やニューディール期を通じて徐々に確立されていった連邦政府の諸制度はこうした「ナショナル・クラス」の思想を踏まえたものである<sup>20</sup>。

PMRCの訴えたラベリング制度も、そうした20世紀米国の制度のあり方と同様にシステムチックなものとして構想された。レコードの内容に応じて、暴力的なものや性的な歌詞を含む作品には「X」、ドラッグやアルコールの濫用を美化する歌詞には「D/A」、オカルトに関する歌詞であれば「O」といったシンボルを付与し、作品を機械的に分類する制度を採用することで、購入時の消費者の判断がより容易になるというのがPMRCの主張だった。最終的に購入するか否かについて上からの干渉がある訳ではなく、判断は消費者に任されるのであって、消費者の選択の自由は増大すると言えるという考え方である。ゴアは、歌詞にどのような内容が含まれているかをラベルによって表示することは、「食品の品質表示において、塩が入っているなら塩と記載することと同じ」だと述べており、食品の原材料表示が商品を市場から駆逐することにはつながらないように、ラベリング制度が特定のレコードを市場から追放したり、表現者の表現の自由を侵害することはないと訴えた<sup>21</sup>。

本来、経済や国防といった一般の人々の日常からは遠い連邦規模の事柄に限って権力を持つことでその正当性を得ていた「ナショナル・クラス」は、道徳的、文化的事象については個人の自由に任せることを重視していた。PMRCは、ラベリング制度が音楽業界によって自主的に確立、施行されることを強く求めており、規制立法や宗教的権威といった上からの圧力によって文化的規準が定められることには断固として反対した。PMRCは更に、客観的なスタンダードに基づいて合理的にレコードを管理することは可能だという信念から、「音楽業界がいかかわしい内容を定義づけるため

のガイドラインの作成委員会を設置し」、「音楽業界によって定められた統一基準」を採用するべきであるという考えにこだわったのである<sup>22</sup>。

反「ポルノ・ロック」というPMRCの主張は、1970年代末から80年代初頭にかけて南部のバイブルベルトで隆盛になった宗教右翼団体によるロックミュージック批判運動と親和性があった。そのため、PMRCはパット・ロバートソンの700クラブを始めとする種々のキリスト教団体から、公式に支持を表明されることが少なくなかったが、公に連携を組むことはすべて頑なに拒否している。70年代以降、マスメディアを巧みに利用し、徐々に勢力を増しながら、大衆の保守化を推し進めることに大いに貢献した宗教右翼勢力は、イデオロギー的に偏りがあり、悪魔的であるという理由で何千枚というロックレコードを集団で焼き捨てるような狂信的で過激主義的な行動を伴うことがあった。そうした「必要ならば強制によってでも、道徳的生活を送る」ことこそ自由であるという宗教右翼の信念は、私的な自由を重んじ、科学を味方につけた理性的なエリートの目には抑圧的プロテストантиズムと映った<sup>23</sup>。

クリストファー・ラッシュによれば、上層中産階級者エリートたちは、「進歩を妨害するあらゆるものを象徴する」、「ミドル・アメリカ」人の旧態依然とした生活態度や思想に対して密かに軽蔑の念を抱いているという<sup>24</sup>。ゴアやベイカーは、自身が子供時代にロックンロールに親しみながら育ち、今でも新しいポピュラー音楽を子供たちと共に楽しむことのできる「進歩的な」消費者であることを強調し、頑迷固陋な価値観の持ち主とは異なることを主張した。そして、「ポルノ・ロック」が子供たちに好ましからざる影響を及ぼしていることについては、心理学者や大学の音楽博士ら専門家の客観的事実に基づく科学的、合理的な見解によって明らかにされていると訴えた<sup>25</sup>。

<sup>22</sup> Wiebe, *Self-Rule*, p. 209; Bob Love, “Battle over Rock Lyrics Heads for Round Two,” *Rolling Stone* (September 26<sup>th</sup>, 1985), p. 22; Marsh, “Sympathy for the Devil,” p. 17.

<sup>23</sup> エリック・フォーナー（横山良、竹田有、常松洋、肥後本芳男訳）『アメリカ 自由の物語』（岩波書店、2008年）下、213, 227頁（以下、フォーナー『アメリカ 自由の物語』と略す。）; Chastagner, “The Parents’ Music Resource Center,” p. 181.

<sup>24</sup> ラッシュ『エリートの反逆』、37頁。

<sup>25</sup> Molotsky, “Hearing on Rock Lyrics,”; Gore, *Raising PG*

<sup>20</sup> ラッシュ『エリート反逆』、37頁; Wiebe, *Self-Rule*, pp. 155-159, ch. 9.

<sup>21</sup> Marsh, “Sympathy for the Devil,” p. 17; Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p. 27; The Editors, “Rock Ratings: An Unnecessary Evil,” *Rolling Stone* (November 7<sup>th</sup>, 1985), p. 10.

### (3) 「ナショナル・クラス」の十字軍的性格と伝統的な中産階級の道徳観

このように上層中産階級のモラリストである「ナショナル・クラス」は合理的かつ個人主義に基づく自由で寛容な思想を持つ一方で、自らのものとは相容れない狭量で非寛容な思想に対する容赦のない態度も持っていた。そのため、もともととは個人の領域として干渉しないはずだった道徳的、文化的問題に大きく踏み込み、他の階級との摩擦を引き起こす場合がある。ラッシュによれば、上流中産階級のエリートたちは「人生に対する態度をつくりあげるのに階級差がはたす重要性を把握しえないために、健康や道徳的向上に関して自分がいなく強迫観念の階級的性格を考慮に入れることができない」。彼らには、自分達の健全な人生観がなぜ広く熱狂的な支持を得られないのか理解することが難しく、その結果、「アメリカ社会衛生化十字軍」となってしまったのである。ラッシュは以下のように議論を続ける。

主導権を握ろうとして抵抗に出会うと、彼らは上流中産階級特有の慈悲心をあらわすほほえみの表情を浮かべるが、その表情のすぐ下に毒気を含んだ憎悪の感情があることを隠すことができない。この人道主義者たちは、自分たちの意見に反対されると、自分たちが断固支持すると言っている自由の美德を忘れてしまうのである。そこで彼らは不機嫌になり、独善的になり、非寛容になる<sup>26</sup>。

こうした「ナショナル・クラス」の矛盾した頑なな態度は、PMRCの言動の中にも見てとることができる。PMRCの反「ポルノ・ロック」という主張を導く価値観は、ヴィクトリア朝時代にまで遡ることのできる白人中産階級の道徳的価値観と非中産階級に対する介入の伝統を反映したもので

あるとすることができるだろう。女性が家庭の道徳を守り、その中で子供たちは安心して成長することができるという「家庭性」のイデオロギーは、ヴィクトリア朝中期の改革運動を経て白人中産階級のアイデンティティの中枢に据えられ、性的禁欲を推進し、暴力やアルコール、薬物を嫌悪する態度の基盤となってきた。クリスチャン・スタンセルによると、19世紀半ばの改革者たちは、表向きには「都市の子供たちを墮落と危険から救うことを目的」としながら、中産階級が、あらゆる階層のアメリカ人の家庭生活に関する基準をコントロールし、「文化的権力」をふるう階級となることを正当化した<sup>27</sup>。

20世紀になって、ヴィクトリア朝中期の改革運動の精神を引き継いだ革新主義の主流においても、リベラルな改革者と教会が「社会的な一体性と均質性を強調し」、同じ人道主義的目的を掲げて下層階級や移民の生活に介入していた<sup>28</sup>。「子供救済十字軍」としてのPMRCの主張には、このような自己規律を重んじる道徳観と他の階級に干渉する態度が如実に反映されている。PMRCは、リベラリストを自称するティッパー・ゴアとボーン・アゲイン・クリスチャンであり、有力なキリスト教原理主義団体であるフォーカス・オン・ザ・ファミリーの役員であったスーザン・ベイカーが協力し、レコード業界による統一基準の設定にこだわり、すべての人がそれに従って適切な判断を下すことを求めた（但し、上述したように、PMRCは宗教団体からの支持を公式に受容することはなかったため、フォーカス・オン・ザ・ファミリーとの連携は行なっていない）<sup>29</sup>。そして、ゴアは、「私たちは、自分たちと子供たちが暮さねばならない公的環境において、何が好ましいものであり、

*Kids in an X-Rated Society*, pp. 56-58. 上院公聴会では、テキサス州立大学の音楽博士ジョセフ・ステューシーとテネシー州メンフィスの病院で青少年の薬物中毒の治療にあたる精神科医ポール・キングの2人がPMRCの活動の主張に正当性を与える証言を行なった。

<sup>26</sup> ラッシュ『エリートの反逆』、36-37頁。ラッシュがエリートを「アメリカ社会衛生化十字軍」と表現し、註4で取り上げたSheinfeldがPMRCを「子供救済十字軍」呼んでいたという共通性は注目に値する。

<sup>27</sup> クリスチャン・スタンセル「女性、子ども、街の利用 1850年代のニューヨーク市における階級及びジェンダーの対立」、ヴィッキー・L・ルイス&エレン・キャロル・デュボイス編（和泉邦子、勝方恵子、佐々木孝弘、松本悠子訳）『差異に生きる姉妹たち アメリカ女性史における人種・階級・ジェンダー』（世織書房、1997年）、5-8、23-27頁。米国では19世紀にイングランドのヴィクトリア朝的な道徳を重んじる文化が見られ、スタンセルのようにこの時代を「ヴィクトリア朝時代」と呼ぶことがある。

<sup>28</sup> フォーナー『アメリカ 自由の物語』上、234頁。

<sup>29</sup> Dave Marsh and Phyllis Pollack, "Wanted for Attitude," *Village Voice* (October 10<sup>th</sup>, 1989), pp. 35-36.

何がそうでないのかを決定する権利を有しています。共通の目的に対する相互のコミットメントによって、私たちは他者から真理と価値観を守ることができるのです」と述べ、自らの判断による好ましいものとそうでないものの区別は、議論の余地のない「真理」となるのであり、異なる価値基準を有する人々は「他者」であり、闘わなければならない相手であると定めた<sup>30</sup>。

PMRCが結成された1985年には、ロバート・ベラーの研究チームが行なった社会学的研究の成果『心の習慣』がベストセラーとなった。それは個人主義の行き過ぎによって公共心が衰退した現実を人々に突きつけるものであった。現代のアメリカには共通の基盤がないという広く共有された懸念があり、一体性ある国家としてのアメリカは方向性を見失い、今にも分解しそうに思われた。多くの場合は、ベラーらのように共通基盤の不在を指摘することはできても、その問題の複雑さと根深さ故にそれをいかに創出、或いは再生するかについては具体的なヴィジョンを示すことができなかった<sup>31</sup>。ゴアは、「家族のあり方やその他の社会的変化によって旧来の範を崩壊させられる時も、私たちは自らの価値観を個人とコミュニティの行動を通じて再度主張すべきなのです。どのような政治的信条を持っている人であろうと、…みな同様に、もう1度私たちの社会の道徳的基盤を守るために身を捧げる必要があるのです」<sup>32</sup>と述べている。社会にあるべき文化的規範や道徳的規準といったものが失われていることこそ最大の問題であるという考えにおいては、PMRCも当時の社会の懸念を踏まえている。しかし、PMRCにとっては、確固たる規範の中身は議論の余地のない絶対的な価値であった。その価値は時代の移り変わりなどで揺らぐようなものではなかった。現在は、単にロックミュージックが過激なものとなり、その結果、子供世代の精神が毒されたことで一時的にそれが失われているだけなのである。だから、そのような部分的逸脱を修正すれば、再び社会の

中枢に絶対的な規範を据え直すことができるとPMRCは考えた。レコード業界に道徳上の規準—ゴアの言葉で言い換えるならば「道徳的コンセンサス」—を設けることは、「道徳的基盤を守るため」の1つの具体的な方法だったのである<sup>33</sup>。

#### (4) 無階級社会の神話の信奉

「ナショナル・クラス」エリートの一方向的な道徳観は、「公共の事柄について意義ある信条を殆ど持ち合わせていない」<sup>34</sup>大多数の市民に代わって国を導かねばならないという使命感に加えて、戦後の無階級社会神話の信奉によって一層強圧的なものとなった。PMRCは異なる階級や人種の人びとの境遇に対してまったくといっていいほど想像力を欠いていたのである。戦後のアメリカ社会を白人中産階級エリートとして生きてきたPMRCのメンバーたちは、「無階級社会においてすべての人びとが繁栄を享受するという理想」を実現するための推進力となってきた。彼らは、大衆消費を通じて、経済的豊かさと民主的な政治の自由が公平に遍く分配されるという国民的信仰のもっとも熱心な支持者であり、そう信じるに足るだけの恩恵を他の誰よりも多く受けた。戦後アメリカをこのような「消費者共和国」という枠組みで捉えたりザベス・コーエンは、このシステムは労働者階級者よりも中産階級者を、非白人よりも白人を優遇する、つまりは白人中産階級者による支配を強化するよう構築されていたと論じている。しかし、少なくとも1960年代から70年代初頭の戦後の経済成長が続く間は、誰ひとり損をすることなく、より平等で豊かな社会が実現するという楽観的な見立てが広く共有された<sup>35</sup>。

ところがアメリカ経済が停滞した70年代には「消費者共和国」の理論枠組は実質的に機能しなくなり、レーガン政権によるサプライサイドエコノミーによって80年代には階級の二極化や中産階級の没落が進んだ。しかし、PMRCのメンバーのような上流中産階級者たちはその煽りを受けることがなかったために、80年代半ばになっても当時

<sup>30</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p. 101.

<sup>31</sup> ロバート・N・ベラー、リチャード・マドセン、ウィリアム・M・サリヴァン、アン・スウィドラー、スティーヴン・M・ティプトン（島蘭進、中村圭志訳）『心の習慣』（みすず書房、1991年）例えば5, 7, 10, 11章。

<sup>32</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p. 12.

<sup>33</sup> Tipper Gore, 'Curbing the Sexploitation Industry,' *New York Times* (March 14<sup>th</sup>, 1988), p. 19.

<sup>34</sup> Wiebe, *Self-Rule*, p. 225.

<sup>35</sup> Cohen, *A Consumers' Republic*, pp. 126-7.

の楽観主義を保持することができた<sup>36</sup>。PMRCは、「圧倒的多数の人々は中道である」と信じ、そのような人々と道徳的価値観を共有していると考えた。そして誰もが彼女たちと同じような生活が送れる筈だという信念に基づいて国家の一体性の回復を図ったのである。それ故にその議論からは、異なる境遇に暮らす非エリート、非白人であるアメリカ人の存在を感じ取ることができない。ティッパー・ゴアが子供の飲酒や薬物使用への対策として、「親はもっと子供に時間を割くように」と助言をする時、マイケル・ムーアが映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』の中で描いたような、往復数時間のバス通勤をして、「ウェルフェア・トゥ・ワーク」政策によってあてがわれた最低賃金労働を日々こなす労働者階級のシングルマザーの姿は想像されてはいない<sup>37</sup>。

PMRCとその追従者たちは、主としてヘヴィ・メタルとラップを非難の対象としたが、それらの音楽を支持する人びとやその中に歌いこまれた現実が自分たちと異なるものであるとは考えていない。実際には、熱心なヘヴィ・メタルの聴衆の多くは労働者階級の少年たちだった。彼らは「投票年齢にも達しない、何のスキルも持たない、それでいて親や教師といった権威と衝突ばかりする」上に、長髪や鉤付きの服装という特徴的な出で立ちで人目につく社会の「有害分子」とみなされていた。ラップもまた、もともとはロサンゼルスやニューヨーク市、ワシントンDCといった大都市のインナーシティの黒人やラティーノの若者たちの間から生じ、下層階級のマイノリティのアイデンティティを背負った音楽であった。ラッシュは、上流中産階級者の生活様式と他の階層のそれが著しく乖離していることを指摘しているが、男性性を誇示するかのような表現や、インナーシティの現実としてのドラッグ使用の描写などは、PMRCの目には許しがたい後進的マチズモであり、不道

徳と映った<sup>38</sup>。

このような「ナショナル・クラス」エリートとしての階級アイデンティティによって結びついた女性たちのグループであるPMRCは、自らの価値観こそが「平均的」な市民のそれを代表すると位置づけ、民衆を指導するエリートとして、「より大きな文化的文脈において、人々が健全な(normal)文化とは何かを理解することを手助けする交渉人として機能する」ことを目指した<sup>39</sup>。PMRCの時にリベラルに見え、時に保守的に思われる思想や運動のあり方は、彼女たちを中産階級エリートと位置づけることで理解することができる。PMRCは、アメリカの道徳文化に対する「ナショナル・クラス」の優位性と、その指導的地位を信奉するが故にイデオロギーを超越した結束を実現することができた。そして、ワシントンの政治経済に限りなく近い、政治家や実業家の妻たちでありながら、自らは政治家でも実業家でもない、という特殊な立場を利用して、PMRCの創立者たちは政治的イデオロギーに捉われない協力関係は築き得るのだということを社会に示してみせた。ベーカー財務長官とゴア民主党上院議員がワシントンで連帯することは極めて難しいが、妻たちなら公益団体を結成し、中道の立場から旧来的な「超党派の運動」を展開することができたのである<sup>40</sup>。PMRCは自らを『『平均的な人々』によって構成された同質的コミュニティ』として打ち出すことで、所在が不確かになってゆく「公的精神」を自ら体現すると共に、分裂の危機にある「国家の集団的アイデンティティの基礎を守」り、「ナショナル・クラ

<sup>38</sup> Marsh, "Sympathy for the Devil," pp. 17-18; Cocks, "Rock Is a Four-Letter Word," p.71; Jeff Chang, *Can't Stop Won't Stop: A History of the Hip-Hop Generation* (New York: St. Martin's Press, 2005), pp. 220-229; ラッシュ『エリートの反逆』、3頁。

<sup>39</sup> Fontenot and Harriss, "Building a Better PIG," pp. 567-570.

<sup>40</sup> ギトリン『アメリカの文化戦争』、92-94頁；近藤健『アメリカの内なる文化戦争—なぜブッシュは再選されたか』（日本評論社、2005年）；アーサー・シュレジンジャー・ジュニア（都留重人監訳）『アメリカの分裂—多元文化社会についての所見』（岩波書店、1992年）、144頁。シュレジンジャーは、文化戦争においては、深刻なイデオロギイ的分裂が見られ、カトリックに対する反発や禁酒法といった過去の文化的争点が「超党派の運動」であったのとは対照的であったと説明している。PMRCの運動は、そうした過去の「超党派の運動」の体をなしていると言うことができるだろう。

<sup>36</sup> Cohen, *A Consumers' Republic*, pp. 388-396.

<sup>37</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p. 139; *Bowling for Columbine*. Dir. Michael Moore. United Artists. 2002. DVD. ここで描かれる welfare-to-work 政策とは、単に生活保護を給付する代わりに政府が職をあてがう制度。映画に登場する女性は、芸能人が経営する富裕層向け飲食店で、最低賃金の給料を受け取っている。長時間の労働とバス通勤をしている間、幼い子供の面倒をみることはできない。

ス」にとって安定した理想的社会を再確立することを目指した<sup>41</sup>。

PMRCは自らの価値観が社会のコンセンサスであると思い込み、それを議論の俎上に乗せて試すことも、「ポルノ・ロック」とは何かというラベリング制度の制定に関わる実質的な議論も一切受け付けなかった。アメリカ社会においてどのような表現がポルノグラフィックであり、猥褻であるかに関する明確で一貫した定義や基準は存在しない。現在、猥褻に対する判断基準として用いられる3つのポイントは1973年に「ミラー対カリフォルニア」<sup>42</sup>事件を通じて最高裁によって以下のように定められた。(a)「平均的な人物が今日のコミュニティのスタンダードを適用し」、当該作品が全体として、好色な関心に訴えるか否か(1957年「ロス対合衆国」の判決を踏襲)、(b)当該作品が明白に不快な方法によって、該当する州法が特に定めるような性的行為を描写しているか否か、(c)当該作品が全体として、重要な文学的、芸術的、政治的、或いは科学的価値を欠いているか否か。

しかし、この判決に対してウィリアム・J・ブレナン最高裁判事は、第1の基準に定められている「スタンダード」の意味するところは非常に主観的で曖昧であるとして、ミラー基準の正当性に疑問を呈している。この基準は、もともと1957年に「ロス対合衆国」事件の最高裁判決で定められた内容を踏襲したものだが、文化戦争の最中にあり、アメリカ人としてのアイデンティティの定義が熾烈な論争にさらされている1980年代半ばに、「平均的人物」や「コミュニティのスタンダード」がどのような内容を指すのかを定めることがいかに困難であるかは想像に難くない。後には、アントニン・スカリア最高裁判事も、第3の基準に則った判断は、たいへんに幅の広い個人的な好みによって下されるものであり、「好みについて議論をする必要はないため、法廷で争われる内容ではない」と論じている<sup>43</sup>。

ロックミュージックの規制をめぐる問題を憲法修正第1条の観点から論じたアン・L・クラーク

は、ミラー基準では、いかなる音楽表現も猥褻であると判断することはできないとしている。その理由としてクラークは、音楽作品は音楽と歌詞とを合わせて「総合的に」判断されなくてはならないため、芸術的価値が一切ないとは言い切れないことや、1枚のレコードに猥褻な曲とそうでない曲が含まれる場合、全体としていかに評価するかという難しさがあること、そして、映像ポルノと異なり、音楽の持つメッセージは解釈の幅が広いことなどを挙げている。更にミラー基準の問題点として、主観的判断に依存するため、何が訴追対象となるか予測不可能であるばかりでなく、恣意的訴追を可能にするという問題点を指摘している<sup>44</sup>。

PMRCは自らと価値観を共有する多数派の存在を前提としてその正当性を得ていたが、ウィービーによれば均質的戦後社会はとりわけ「ナショナル・クラス」によって信じられた世界でもあった。先述したように、この階級は、個々人の日々の生活にとっては関わりの薄い連邦の諸問題を処理してきたのであり、大衆の生活と深く関わりのある身近な道徳的、文化的問題は、本来、地方共同体の支配層である「ローカル・ミドル・クラス」とされる地方の多数派集団が扱うものとされていた。基本的には合理主義や自由主義を奉じる「ナショナル・クラス」に対して、「ローカル・ミドル・クラス」、すなわち州の主権は、「記憶と習慣に支えられ、さらに地域の偏見、地方や家族の利己主義がこれを支持する」ものであり、これら2つの階級の文化的差異は、両者をしばしば競合関係に陥らせた<sup>45</sup>。

ラベリング問題についても、「ナショナル・クラス」に属するPMRCは、教養ある専門家集団に任せれば、子供と悩める親たちのために正しきものを選別し、授けるための基準とルールは容易に、合理的かつ効率的に策定できるはずだという考えから、精神科医や大学教授らの言説を通じて、科学的、合理的に人々を説得することを試みた。しかし、「ローカル・ミドル・クラス」はPMRCの提起した過激なレコードに関する問題を地域の常識や秩序維持という観点から捉えたために、議論は

<sup>41</sup> Chastagner, "The Parents' Music Resource Center,"

*Popular Music*, p.180

<sup>42</sup> *Miller v. California*, (1973), 413 U.S. 15.

<sup>43</sup> Anne L. Clark, "As Nasty As They Wanna Be," *New York University Law Review*, vol.65: 1481, (December, 1990), p. 1509.

<sup>44</sup> Clark, "As Nasty As They Wanna Be," pp. 1514-1519.

<sup>45</sup> アレクシス・ド・トクヴィル(松本礼二訳)『アメリカのデモクラシー』(岩波文庫、2008年)、第1巻上、272頁; Wiebe, *Self-Rule*, pp. 224, 228-30.

次第に感情的な闘争の色合いを帯びていった。ゴアは「民主的な社会においては、人々の意志は政治的過程とコンセンサスを得た地域社会の活動を経て表明される」<sup>46</sup>と語ったが、彼女が想定したコンセンサスや地域社会の活動の内実は、現実の様々な地域社会の文化規範や慣習とは相容れなかった。そのため、ラベリング制度に関する議論は地方共同体において、PMRCが予想もしなかった抑圧的帰結を招くこととなった。「記憶と習慣に支えられ、さらに地域の偏見」が強い影響力をふるう地方共同体では、PMRCの主張は先鋭化させられ、独り歩きを始めたのである。そのため「ナショナル・クラス」エリートが想定する白人中産階級的「道徳的コンセンサス」のもとでの一体性ある共和国を再生するというPMRCの試みは骨抜きにされてしまう。

### 3. 州の主権：「ローカル・ミドル・クラス」

合理性や中立的な正しさが存在するという前提に基づきながら連邦規模の問題を処理する「ナショナル・クラス」エリートに対して、大衆の生活とより密接に関わる身近な問題を取り扱う「ローカル・ミドル・クラス」の多数派の判断は、地方共同体ごとの習慣や偏見、利己主義に基づいている。従って、「共同体のスタンダード」とは、PMRCが想定したような、一律的、客観的なものではなく、より感情的で偏狭なものだった。そのためPMRCによって全国に広がったレコードラベリング制度推進の運動は、「ローカル・ミドル・クラス」の主導のもと、PMRCの意図とは異なる形で展開することとなった。本節ではその象徴的な事例を4つ取り上げたい。

#### (1) 市場への影響

##### 一冷却効果（チリング・イフェクト）

PMRCの主張に反して、1985年の上院公聴会において、早くも「ポルノ・ロック」の規制立法に対する積極的な姿勢がジェームズ・エクソンやアーネスト・ホリングスといった議員らによって示されていた<sup>47</sup>。また、公聴会の直後にはレーガン

大統領が、音楽業界はポルノグラフィの製作者であり、「ポルノ・ロック」は合衆国憲法修正条項第1条による保護の対象外であるという発言を行なっている。こうした政治家たちが規制立法の可能性をちらつかせる一方で、どのような表現や音楽が「コミュニティのスタンダード」で受容され得るのか、明白な規定はどこにもなかった。そのためとりわけショッピングモールに店舗を持つ小売店は厳しい対応をとらざるを得なかった。顧客離れを防ぐためにモールの所有者たちは住民の好みや基準に敏感に対応し、トラブルの元となるものは前もって徹底的に排除したからである<sup>48</sup>。

1985年9月の公聴会に関する記事をまとめた時点で、デイヴ・マーシュは国内で2番目の規模を誇るレコード小売チェーンであるキャメロットが、まだRIAAによる具体的な取り決めは何も行われていないにもかかわらず、RやXの指定を受けたレコードを扱えばショッピングモールでの賃貸契約が失われることを早くも危惧していたことを報告している。警告ラベル付きのレコードを取り扱うことで、顧客を喪失したり、敷地内でデモが発生したりすることをモール所有者が憂慮するためである<sup>49</sup>。レコード会社が貼付する警告ラベルは、消費者の選択の自由を拡大するものだとしてPMRCは主張したが、現実にはラベル付きレコードの取り扱いが一切なされなくなることで、選択の幅はむしろ狭まることとなった。この傾向は1985年から1990年代初頭にかけて徐々に強まった。

中でも大きなインパクトを持ったのは、全米のレコード売り上げの1割を占める量販店チェーン、ウォルマートが1986年秋に特定のロックやコメディのレコードと『ローリング・ストーン』を含む「ロックやポップカルチャーに関する雑誌」の取り扱いを一切中止すると決定したことだった。ウォルマートの決定は、キリスト教原理主義者でありテレビ伝道師のジミー・スワガートがウォルマート及びKマート（同様に全国展開の量販チェーン）は子供に悪影響を与えるレコードを販売しているとPMRCのレトリックを用いて非難したこ

<sup>46</sup> Gore, *Raising PG Kids in an X-Rated Society*, p. 101.

<sup>47</sup> Zucchini, "Big Brother Meets Twisted Sister," p. 65; Earnest Hollings, "Opening Statement by Senator Hollings," *Record Labeling, Senate Committee on Commerce, Science,*

*and Transportation, 99th Cong., 1st sess.*, 1985.

<sup>48</sup> James R. McDonald, "Censoring Rock Lyrics: A Historical Analysis of the Debate," *Youth and Society*, 19:3 (March, 1988), p. 304.

<sup>49</sup> Marsh, "Sympathy for the Devil," p. 19.

とが発端であると見られている<sup>50</sup>。それに対して南部を拠点とするウォルマートが何らかの対策を講じる必要があったことは、共同体のスタンダードに準ずるショッピングセンターの性質を考えれば自然な流れと言える。

こうした状況を受けて、各レコード会社は貴重な販売経路が断たれることを最小限に抑えるため、ウォルマートのような小売店の顔色を慎重にうかがいながら商品を製作せざるを得なくなった。各レーベルは既に市場に流通している商品を参考にしながら、警告ラベルなしの作品を作るために歌詞やアルバムアートワークの表現を和らげるようミュージシャンたちを説得しなければならなかった。但し、プリンスのように既に大スターの地位を確立しているミュージシャンはそれほど影響を受けることなく、自由な創作を続けることができた。プリンスは1984年の『パープル・レイン』の後、1991年までに3枚のレコードをリリースしているが、売り上げは全く落ちなかった<sup>51</sup>。自由や機会を奪われたのは主に独立系レーベルのオーナーやミュージシャンたちだったのである。

## (2) 法的処罰—デッド・ケネディーズ『フランケンクライスト』事件

インディレーベル及びミュージシャンの受難は、1986年にカリフォルニアのアンダーグラウンドシーンを牽引するパンクバンド、デッド・ケネディーズのアルバム『フランケンクライスト』をめぐる一連の事件によって明白なものとなった<sup>52</sup>。『フランケンクライスト』はレコードスリーブ内に、スイスの画家であるH. R. ギーガーの作品『ランドスケープ #20：我々の起源』（1973年）のポスターを封入していた。この絵画は均質な男女の結合した性器を幾つも機械的に配置した模様を描写しており、レコードカバーには、「このレコードカバーの中に折込まれているH. R. ギーガーの作品

は、人によってはショックや嫌悪感や不快感を覚えるものかもしれない」と書かれた独自の警告ラベルが貼付されていた。このレコードを1985年のクリスマスにカリフォルニア州サンフェルナンドヴァリーに住む14歳の少女が購入し、11歳の弟への贈ったことが事件の発端となった。ギーガーのポスターを見てショックを受けた母親は、カリフォルニア州検事局へ連絡を取り、ロサンゼルス副検事マイケル・ガリノが問題にあたることとなった。

ガリノはギーガーのポスターは未成年に相応しくないと判断し、1986年4月15日にデッド・ケネディーズのメンバーであり、バンドの所属レーベル、オルタナティヴ・テンタクルズのオーナーでもあるジェロ・ビアフラの家宅捜索が警察によって行なわれた。そして6月2日、ガリノは、ビアフラとその他5人の『フランケンクライスト』の製作、流通に関わった人々を、未成年が「有害な」内容のものと接触することを禁じたカリフォルニア州刑法313条3項違反の疑いで起訴した。これは米国史上初めて、猥褻な音楽の販売が原因で起きた訴訟の例となった。

州刑法は、「有害な」ものについて、「アナルセックス、オーラルセックス、性交、自慰行為、猥姦、男性器の写真」と具体的な内容を示す一方で、『有害なもの』とは、包括的に考慮し、今日の州内の基準において平均的な人物が、猥褻な関心に訴えると考えるもの、明白に不愉快な方法によって性行為を描写、説明し、いかなる点においても未成年者にとって重要な文学的、芸術的、政治的、科学的価値を欠くと考えるものを意味する<sup>53</sup>との定義づけを行なっている（引用内下線は筆者による）。この法によれば、問題となるギーガーの絵画は猥褻と判断されなくとも、「有害」と認められれば訴追の対象とすることができた。ビアフラはポスターをレコードに封入した動機について、「これ見よがしの消費文化のこれまで見た中でも最高のメタファーだと考えたため」であると主張し、ポスターは音楽表現の一部を為すとも述べたが、ガリノやPMRCはそこに未成年にとっての政治的、或いは芸術的価値があることを認めなかった。PMRCはガリノの判断に対する支持を表明し、レ

<sup>50</sup> Michael Goldberg, “Wal-Mart Bans LPs,” *Rolling Stone* (September 11<sup>th</sup>, 1986), p. 15; Nuzum, *Parental Advisory*, pp. 23, 39, 78.

<sup>51</sup> Chastagner, “The Parents’ Music Resource Center,” pp. 188-189; プリンスの売り上げ記録は Covach, *What’s that Sound?*, p. 452 を参照。

<sup>52</sup> 以下、『フランケンクライスト』問題に関する判決前までの事実は Doug Simmons, “The First Porn Rock Case,” *Village Voice* (July 1<sup>st</sup>, 1986), p. 91 を主に参照した。

<sup>53</sup> Ca. Penal Code Chapter 7.6 Harmful Matter, Section 313.

コードに封入されたポスターはポルノグラフィであり、自主的に貼付されたラベルは不十分で、「誠実な包装」を欠くものであると断じた<sup>54</sup>。

しかし、1987年8月にロサンゼルス上級裁判所で行なわれた公判に際して市の「平均的な」人々は地域の基準を示すことができなかった。陪審団は、ビアフラを無罪とする意見が僅かに多く7対5で判断が分かれたまま膠着状態に陥り、ビアフラは実質的に無罪放免となった。しかし、結果に関わらず、この裁判はジェロ・ビアフラにとっては大きな打撃となった。プリンスのようなメインストリームで活躍するスターミュージシャンが、大規模なレコード会社には守られながら、スタジアムで何万人という観客を動員する1980年代後半の音楽業界において、デッド・ケネディーズやオルタナティヴ・テンタクルズは、平均2000人のオーディエンスを前にコンサートを行ない、独自の流通経路を自力で確保するマイノリティであった。ビアフラにとって6万ドルを超える裁判費用は致命的な出費だった。また、カリフォルニア州内では多くのレコード店が同様のトラブルに巻き込まれることを恐れ、デッド・ケネディーズの作品の取り扱いを中止した。デッド・ケネディーズは1986年11月に『ベッドタイム・フォー・デモクラシー』という皮肉なタイトルでスタジオアルバムを発表したきり、ビアフラの審理が終わるより早く解散した<sup>55</sup>。

『フランケンクライスト』のポスターをめぐるこの裁判事件は、独立系レーベルやミュージシャンのみならず、音楽産業に携わるすべての人々を震撼させた。今や既存の法律によって、音楽作品が裁かれることが現実となったからである。訴追の可能性をできる限り回避するため、レコード会社は社内に歌詞を点検するための委員会を設置したり、ミュージシャンたちに控え目な表現を迫るなどし、流通会社や小売店、ラジオ局は、際どい表現を含む作品やレコード会社が警告ラベルを貼付したレコードの取り扱いを拒むようになった。ビ

アフラの審判にあたって陪審員が明らかにしたように、「平均的人物」や地域共同体の基準の示す内容が不透明であるが故に、業界全体が過剰に慎重になるよりほかになかった。小売業者の中にはメイヤー・ミュージックのように独自の品質表示ラベルを導入するところも現れた。メイヤー・ミュージックは、1985年の公聴会でもミュージシャン代表として証言を行なったフランク・ザッパのアルバム『ジャズ・フロム・ヘル』に「過激な歌詞」と書かれた警告ラベルを貼付した。しかし、皮肉なことにこの作品は完全にインストゥルメンタルであり、歌詞を一切含まないものであった。ラベルの貼付は、彼が熱心な反検閲運動家であるのは自身の作品が物議を醸す内容であるからに違いないという思い込みによって行なわれたのである。ガリノはこのような委縮効果が生じることを予見しており、州刑法313条3項の適用による訴追は「費用効率の高いメッセージの届け方である」と述べ、デッド・ケネディーズとオルタナティヴ・テンタクルズへの対応は音楽業界に対する見せしめであったことを暗に認めている<sup>56</sup>。

### (3) 規制立法の動き

しかし、音楽業界への締め付けは既存の法律を通じたものに留まらなかった。最終的な判断は消費者に任せるべきだという自由主義的な考えから、立法措置によるラベリング制度をレコード業界に強制することには一貫して反対だったPMRCの主張に反して、「ポルノ・ロック」は次第に立法機関で積極的に取り上げられる問題となっていく。猥褻または暴力的と認定されたロックコンサートに13歳以下の子供が行く際の保護者の付添いを義務化することを定めたテキサス州サンアントニオ市の条例61850号が先例となり、州議会でもロックミュージックを規制する動きが見られるようになった<sup>57</sup>。その先鞭をつけたのは、1986年にメリーランド州で民主党下院議員ジュディス・トスが提出した未成年に対する猥褻なレコードの販売を禁ずる法案である。その後1989年に、ミズーリ州の共和党下院議員ジーン・ディクソンがロック

<sup>54</sup> Clark, "As Nasty as They Wanna Be," p. 1498.

<sup>55</sup> Jeffrey Ressler, "Biafra Trial Ends in Hung Jury," *Rolling Stone* (October 8<sup>th</sup>, 1987), p. 22; Steve Wishnia, "Rockin' with the First Amendment," *The Nation* (October 24<sup>th</sup>, 1987), pp. 444-446; David Fricke, "Dead Kennedys Break up: Jello Biafra's Legal Problems Persist," *Rolling Stone*, (January 29<sup>th</sup>, 1987), p. 27.

<sup>56</sup> Clark, "As Nasty as They Wanna Be," pp. 1490-1491; Nuzum, *Parental Advisory*, p. 39; Simmons, "The First Porn Rock Case," p. 91.

<sup>57</sup> Clark, "As Nasty as They Wanna Be," pp. 1491-1494.

ミュージックは「反抗を促す魔術である」として、猛烈な批判を展開すると共に法案を州議会に提出したことで、南部や北東部を中心に規制立法への気運が高まり、約 20 州で同様の州法が検討された<sup>58</sup>。

PMRCはサンアントニオの条例に対しては、子供たちを有害な音楽から保護するという組織の目的と矛盾しないと考え、支持を表明した。しかし、レコード会社に品質表示ラベルの貼付を義務付けたり、未成年に対するラベル付きレコードの販売を犯罪と規定する州法に対しては、活動当初から掲げていた自主規制の原則に反するとして、RIAA、全国PTAと共に反対運動を展開しなければならなかった。1989年には規制立法への動きが隆盛となったことを受けて、表向きにはレコード業界の中途半端な品質表示を批判しつつ、業界が一律の基準を設けることを再び強く要求した。PMRCの狙いは、業界の自主的な引き締めによって規制立法の成立を回避することであった<sup>59</sup>。

RIAAはそのような状況に追い詰められ、更に小売業界(National Association of Music Merchandisers)からの圧力も高まったため、1990年3月に、1985年の「RIAA-PMRC協定」を改定し、新たに会員全員に共通の警告ラベル(“Explicit Lyrics - Parental Advisory”と記された白黒の縦8分の5インチ、横1インチのラベル: 図2)を導入することを発表した。ラベルを貼付するか否かの決定は、依然として各レコード会社の裁量に委ねられたままであり、RIAAの新たな決定は、真に統一基準を提供するものではなかったが、立法府を中心とする抑圧的な状況に危機感を覚えたPMRCはこれを前向きに評価した<sup>60</sup>。



図2) 1990年3月にRIAAが発表した全会員統一の警告ラベル。

(出典: Report of the Federal Trade Commission, *Marketing Violent Entertainment to Children: A Review of Self-Regulation and Industry Practices in the Motion Picture, Music Recording and Electronic Game Industries*. September 2000.)

しかし、この決定はPMRCやRIAAが望んだほどの効果を生まなかった。1990年7月にはルイジアナ州議会上院が、レイプや殺人、ドラッグの不正利用や児童虐待、悪魔崇拝などを扱った音楽を含むレコードには警告ラベルの貼付を義務付ける法案を29対9で通過させたため、PMRCはバディ・ローマー州知事に拒否権を発動するよう提言し、成立を阻まなければならなかった。ミズーリ州は法案の審議を中止したものの、ディクソンはレコード業界が必要な作品にきちんと警告ラベルを貼付しなければ、1年後には全米で規制律法が審議されるだろうと脅迫的な発言を行なっている。これによって各レコード会社は、確かな基準を欠いたまま、より一層厳格な判断を下さなければならなくなった<sup>61</sup>。

更に深刻なことには、警告ラベルは本来、人によっては当該レコードの内容を不適切と判断し得るという可能性を消費者に示すものであったが、単一ラベルの採用によって、レコードが猥褻であることを意味するものへと性質が変容したのである。警告ラベルはレコードにとっての「スティグマ」<sup>62</sup>となり、小売業者やラジオ局は顧客の抗議や訴追といったトラブルを回避するため、ラベルを貼付されたものは熟慮を経ることなく、取扱いの対象外とするようになった。ウォルマートは統一ラベルの採用が決定されると即座に、従来の独自基準に代えて、今後はラベル付き商品を扱わな

<sup>58</sup> Gerald Selgman, “Twelve States Consider ‘Porn Rock’ Legislation,” *Rolling Stone* (June 19<sup>th</sup>, 1986), p. 19; “Blue Bayou,” *Village Voice* (March 21<sup>st</sup>, 1989), p. 84; Dave Marsh, “Perception: Protection, Reality: Censorship,” *Village Voice* (May 29<sup>th</sup>, 1990), pp. 85-86; Michael Goldberg, “At a Loss for Words,” *Rolling Stone* (May 31<sup>st</sup>, 1990), pp. 19, 21-22. 但し、実際に法案が施行された例はない。

<sup>59</sup> Goldberg, “At a Loss for Words,” pp. 19, 21-22.

<sup>60</sup> Jon Pareles, “States Drop Record-Labeling Bills,” *New York Times* (April 6<sup>th</sup>, 1990), C36.; Nuzum, *Parental Advisory*, pp. 39-40, 263-264. この統一ラベルが2014年2月現在も使用されているものである。

<sup>61</sup> Jon Pareles, “Louisiana Bill Would Require Warnings on Recordings,” *New York Times* (July 7<sup>th</sup>, 1990), p. 16; Chastagner, “The Parents’ Music Resource Center,” p. 187; Goldberg, “At a Loss for Words,” p. 22.

<sup>62</sup> Chastagner, “The Parents’ Music Resource Center,” p. 187.

いことを発表し、シアーズやJ.C.ペニーズといったその他の大手小売業者もそれに続いた<sup>63</sup>。

影響力のある小売業者の中には、タワーレコードやトランス・ワールドのように、警告ラベル付きレコードの取扱いが続けたものの、未成年への販売を禁止する方針を選んだものも少なくなかった。最も極端な例は、1992年のスーパー・クラブ・ミュージック・コーポレーションの決断に見られる。スーパー・クラブは過去に警告ラベルが貼付されたレコードやミュージシャンを参考に、独自に18歳未満には販売を行わない音楽の「ブラックリスト」を作成し、そのルールの確実な遵守のため、リスト上の商品は会計時に買い手とレジ係の身分証明書内容をコンピューターに登録することを義務付けた。また、レコード店の中には未成年のみならず、18歳以上に対しても特定のレコードの販売を制限するものもあり、PMRCは消費者の選択の自由を侵害するものであるとして抗議を行わねばならなかった<sup>64</sup>。

#### (4) 法執行者の圧力

反「ポルノ・ロック」の波が益々PMRCの手の及ばないところにまで広がっていった例はこれに留まらない。1980年代末から1990年にかけて法執行者によるロック音楽に対する威圧が顕在化した2つの事件が起きた。

1つ目の事例は、ラップグループ、N.W.A. (Niggaz With Attitude) による1988年のアルバム『ストレート・アウタ・コンプトン』に収録されている「ファック・ザ・ポリス」という楽曲に関するものである<sup>65</sup>。この曲はロサンゼルス近郊の貧困地域であるコンプトン出身の黒人たちが、そこで経験する警察による横暴を訴え、過激で生々しい表現によってそれに報復する意図を込めたものだったが、1989年6月以来、南部と中西部の警察では問題視されていた。彼らは歌詞をファックスで伝え合い、オハイオ州トレドやミルウォーキー州ではN.W.A.のコンサート会場の警備をボイコットした。N.W.A.は問題となった曲をコンサート

で演奏することを自粛していたが、デトロイトの公演では演奏を試みたところ、即座に警察が介入し、メンバーたちはコンサート会場を逃げ出す羽目になった。警察官たちはN.W.A.の滞在していたホテルでも待ち構えており、短時間、彼らを拘束した。1人の警察官は報道陣に対して「デトロイトでは『ファック・ザ・ポリス』などとは口にさせないことを示してやりたかった」と述べている。地方警察とミュージシャンの間でこうした騒動が頻発し、問題が可視化されるようになっていくと、遂には連邦捜査局の副長官であるミルト・オーリックから、N.W.A.の所属するプライオリティ・レコードの経営責任者ブライアン・ターナーの元に司法省の便箋に書かれた文書が届けられるに至った。その中には「ファック・ザ・ポリス」は法執行官に対する侮辱であり、当局による憂慮の対象となっている旨が記されていた。オーリックは件の楽曲を実際には聞いていないという。それにもかかわらず「歌詞を読んだところ、警察官に暴力をふるい、殺害することを歌っているため、私には公にされるべきであるとは思えない」という個人的ともとれる意見を述べているのは、地方の警察官の意見を反映してのことであろう。

第2の事例は1990年にフロリダ州を舞台に始まった<sup>66</sup>。1986年に同州マイアミでデビューした黒人ラップグループ、2・ライヴ・クルーは、その頃までに2枚のレコードを通じて地域的な成功を収めていた。彼らは性的に露骨な表現を多用することによって、笑いをとろうとするコミカルなバンドだったが、ポピュラー音楽の表現に対する風当たりが益々厳しくなっていく南部では物議をかもししていた<sup>67</sup>。

1989年に2・ライヴ・クルーが発表した『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』は、その露骨に性的な内容のために、フロリダ、インディアナ、オハイオ、ウィスコンシン、ペンシルヴァニア、テネシーの6州で地方検事によって猥褻であると判断され、訴追を恐れた多くの小売店から追放された。中でもフロリダ州ではブラウオード郡地方検事ジャック・トンプソンが、警察に対してアルバムの内容と、それがフロリダ州法で猥褻

<sup>63</sup> Chastagner, "The Parents' Music Resource Center," p.188; Nuzum, *Parental Advisory*, pp. 77-82.

<sup>64</sup> Chastagner, "The Parents' Music Resource Center," pp. 185, 188; Pareles, "States Drop Record-Labeling Bills."

<sup>65</sup> 以下、事件の経緯や関係者の発言については、Marsh and Pollack, "Wanted for Attitude," pp. 33-7.を参照。

<sup>66</sup> この事件については、Clark, "As Nasty as They Wanna Be," pp. 1481-1531.が詳しい。

<sup>67</sup> Nuzum, *Parental Advisory*, pp. 281-282.

と判断される可能性があることを訴える熱心なキャンペーンを開始したために、アルバムとバンドに対して容赦ない捜査が行なわれることとなった。1990年2月にはブラウード郡保安官ニック・ナヴァロの指示により、保安官マーク・ウィチナーが『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』のカセットテープを購入し、郡巡回裁判所に内容の検討を依頼した。3月9日、メル・グロスマン判事は、アルバムは有害なものの販売を禁じるフロリダ州法で猥褻と判断するに足る根拠 (probable cause) があるとの宣言を出した。ナヴァロはこの判断内容を郡内のレコード各店に送付すると共に、保安官たちを複数のレコード店に派遣し、問題のアルバムの販売を続ける者は重罪犯罪者として起訴される可能性があることを告げさせた。

このような圧力に屈して、郡内の殆どすべてのレコード店から『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』は姿を消した。これに対して2・ライヴ・クルーのメンバーが運営するスカイウォーカー・レコーズは、郡保安官事務所の行為が2・ライヴ・クルーの憲法修正第1条で保護された権利を侵害していると連邦裁判所に訴え出た。ナヴァロはそれに続き、バンドのアルバムはフロリダ州法のもとでは猥褻であるとの判断を州裁判所に求める裁判を起こし、こちらの裁判も連邦裁判所管轄事件として取り扱われた<sup>68</sup>。5月14、15日の公判を経て、6月6日にホセ・ゴンザレス判事は『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』が猥褻であることを判断した。但し、判事はグロスマン判事による宣言は「法的アドバイス」に過ぎず、正式にアルバムが猥褻であることを認めるものではないため、保安官事務所がレコード店に対して行なった行為は法の適正手続を満たさない事前抑制であるとして、憲法修正第1条及び第14条違反であるとの判断も下した。

しかし、ゴンザレスの判決は2・ライヴ・クルーを敵視する人びとに圧倒的に有利にはたらくものであった。地方検事のトンプソンは、「何人も共同体のスタンダードを侵害する形での自己表現や

自己陶酔的な行動をすることは許されない」と歓喜して述べている。そして判決の直後、6月8日には郡内で『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』を果敢に扱い続けていた最後のレコード店であるE. C. レコーズのオーナー、チャールズ・フリーマンがナヴァロの命によって逮捕された。その翌日には、フロリダ州ハリウッ드의クラブで、成人対象のコンサートを行なった2・ライヴ・クルーのメンバーが、『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』に収録された楽曲を演奏したかどで、やはり逮捕された。これらの法的訴追が現実的な脅威となったため、バンドは6月11日に先の裁判について控訴裁判所へ控訴した。

10月に行なわれた公判では、フリーマンは6名編成の陪審によって審理を受けた結果、有罪となり、1000ドルの罰金を科された。その一方で、2・ライヴ・クルーの3人のメンバーは同じく6名の陪審員によって審理を受け、無罪判決を得た。このことは、トンプソンが述べた音楽表現に関わる「共同体のスタンダード」がいかに曖昧なものであるかの証左であるといえる。1992年には第11巡回区控訴裁判所が、『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』は猥褻であるというホセ・ゴンザレス連邦地方裁判所判事の判決を覆した。さらに連邦最高裁判所はそれに対する上告を棄却し、控訴裁判所の判決が有効であるとした。これによって2・ライヴ・クルーは約20か月に亘る裁判から漸く解放されたのであった。

皮肉なことに2・ライヴ・クルーは後にも先にも、これほど物議を醸したアルバム『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』以上に商業的成功を収めた作品を発表することはなかった。この作品は、前2作の性的に過激であるという評判やトンプソンらの締め付けのために、ラジオで放送されることも殆どなかったが、1990年6月までに、前作『ムーヴ・サムシン』の約3倍である170万枚の売り上げを記録し、シングル「ミー・ソー・ホーニー」は全米チャートの40位内にランクインするほどのヒットとなっていた。エリック・ヌザムは、もともと地域的な成功しか収めていなかった2・ライヴ・クルーはこの一連の裁判事件を経なければ決して全国的な注目を集めることはなかった類のバンドであると述べており、『ヴィレッ

<sup>68</sup> *Skywalker Records v. Navarro*, 739 F. Supp. 578, 582 (S.D. Fla. 1990); *Navarro v. The Recording As Nasty As They Wanna Be*, No. 90093249 (12) (Broward County Cir. Ct. filed Mar. 27<sup>th</sup>, 1990).

ジ・ヴォイス』のダグ・シモンズも『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』を最も効果的に宣伝したのは警察や検察であるとしている<sup>69</sup>。このことは裏を返せば、限られた影響力しか持たないミュージシャンに対して検察や警察権力が執拗に攻撃を加えたことを意味している。同様のことはデッド・ケネディーズのジェロ・ピアフラの訴追、N.W.A.へのFBIからの公式文書の送付といった事件についても指摘することができ、音楽業界内でさえ多数派の支持を得ることができない者が不公平な代償を負わされていたことが分かる。また、『アズ・ナスティ・アズ・ゼイ・ウォナ・ビー』をめぐる一連の訴訟は、ミュージシャンとして一定の注目を得られた2・ライブ・クルーが有罪判決を免れたのに対し、ローカルなレコード店のオーナーに過ぎなかったチャールズ・フリーマンが有罪とされたという事実によって、発言や抵抗の機会や手段を持たず、権力から遠いところにいる者ほど不利な結果を被ることを明確に示している。

以上の4つの事例は、PMRCが「ポルノ・ロック」や猥褻のスタンダードの実質的内容に関する議論を怠った結果、レコードラベリング制度の推進運動が秩序を重んじるコミュニティの保守性によって加速度的に先鋭化させられていった事実を明らかにするものである。「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」は、「ポルノ・ロック」に対する問題意識を共有してはいたものの、具体的な対処の方法に対する考え方は大きく異なっていた。そのため地域社会での締め付けは、PMRCの意図に反してレコード販売に対する規制立法や処罰規定の制定といった形で厳格になり、それに伴って市場では冷却効果と呼ばれる委縮が生じ、商品に対する消費者の選択の自由は縮小した。更に、特定の音楽やミュージシャンに対する抑圧は「下層階級」への容赦のない攻撃や構造的な排除として明確に表出し、社会の深い階級的溝を顕在化させた。

## おわりに

以上の議論が明らかにしていることは、文化戦争が深刻化していた1980年代半ばから1990年代初頭のアメ리카において、左右のイデオロギー分裂の一方で複雑な階級間関係が存在したということである。レコードラベリング制度の導入をめぐる運動は、全国的な盛り上がりを見せたことから、一見するとあたかも多数派を形成する人々がPMRCの価値観を共有し、運動を支持したように思われる。確かに、米国の2つの支配階級である「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」は、一部のレコードが過激であり、青少年に対して有害であるという問題意識を共有した。そして、いずれの階級もそれぞれに非エリート階級の中でも特に下層に位置する人びとに主張の機会を与えようとせず、容赦なく抑圧と排除を行なった。ウィービーが指摘したように、「ローカル・ミドル・クラス」の多数派は自分たちが下層階級を監督するのだと言い張り、「ナショナル・クラス」のエリート達は、自分たちが下層階級にとって最善の権利とは何かを決定するのだと強調した<sup>70</sup>。ここに、「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の下層階級の抑圧に対する共犯関係を見てとることができる。

しかし現実には、1985年当時のPMRCが訴えた内容と、後に地方共同体で展開されたキャンペーンの内実には大きな隔たりがあった。現在使用されている警告ラベルは、PMRCにとって八方塞の状況の中から生まれた妥協的なものであり、何らかの一貫した意味を持つ道徳的スタンダードの指標とは言えない。「ナショナル・クラス」主導の一体性ある国家の回復を試みたPMRCの活動は、最終的に「ナショナル・クラス」と「ローカル・ミドル・クラス」の階級間の緊張感と、文化的なずれを顕在化させることにもなった。

1993年までに、レコードラベリングをめぐる議論は、規制推進派と表現の自由を掲げる人びとの間で対立がかつてなく深刻なものとなっていた。1992年には、ラップグループ、ボディ・カウントの「コップ・キラー」という楽曲が問題となり、レコード会社に爆弾テロを予告する脅迫状が送りつけられる騒ぎや警察権力を利用した威圧行為が見られた。それに対して、レコード業界は検閲に

<sup>69</sup> Doug Simmons, "How to Rap Dirty and Influence People," *Village Voice* (June 19<sup>th</sup>, 1990), p. 95; Nuzum, *Parental Advisory*, p.281; Jon Pareles, "Pop View: A New Role for Rock -Fighting Back," *New York Times* (July 8<sup>th</sup>, 1990), A24.

<sup>70</sup> Wiebe, *Self-Rule*, p. 246.

反対する旨の1面広告を『ニューヨーク・タイムズ』、『L.A. タイムズ』、『U.S.A. トゥデイ』、『ビルボード』の4紙誌に掲載した。しかし、こうした議論が冷めやらぬ前にPMRCの4人の創設メンバーはすべて1993年までに組織を去ってしまう。PMRCそのものは、立法を含むより過激なレコード規制を目指す人びとによって引き継がれた<sup>71</sup>。

レコードラベリングをめぐる議論がPMRCの意図に反して急進化し、元来の意味を失った最たる原因の1つにはPMRCが議論を始めた当初から公共的議論を軽んじてきたことがある。彼女たちは「ポルノ・ロック」という大衆が共有できる問題を設定することで、1つの道徳的理想に向かって市民が協力し合い、多数派が安定した社会を作り出すことを目指していた。そのためには「圧倒的多数の人々」とは誰なのか、道徳的スタンダードは多数者によって本当に共有されているのか、そうであるとすればその中身はどのようなものなのか、といった議論が公にされて然るべきだったのだ。しかしPMRCは、「ナショナル・クラス」としての自負から、自らの価値基準が米国社会そのもののスタンダードであることを半ば楽観的に信じ、同時にラッシュが指摘するように、「それだけの能力がないという理由で」公共的な議論から異なる立場や階級に属する人々を締め出し、相容れない意見を持つ人々を「真理」を解しない、「他者」として追いやってしまった<sup>72</sup>。そのことがかえって、「ローカル・ミドル・クラス」が主導する地方共同体ごとにスタンダードに関する解釈を可能にしたのである。その内容はPMRCが想定していたよりもはるかに道徳的に厳格であり、やはり極めて硬直的なものでしかなく、変容しつつある地域社会の現実や、異なる意見を持つ人びとの声を十分に反映してはいなかった。しかし、そのことに関する議論も行なわれず、権力から疎外された下層階級は市民社会への十分な参加もないままに、表現や抵抗の手段と機会を奪われる結果となった。このように、1980年代半ばから1990年代初頭にか

けてのレコードラベリング問題は、中産階級を基盤とする米国社会における階級間関係とその文化的緊張関係を露わにするものであり、そうした階級関係と民主的参加がいかに共存可能であるかといった問いを投げかけるものでもあった。

(たてばやし ななこ・東京外国語大学大学院博士後期課程)

<sup>71</sup> Jeffrey Ressler, "'Cop Killer' is Iced," *Rolling Stone* (September 3<sup>rd</sup>, 1992), p. 16; Steve Stolder, "Aren't Sticker Enough?" *Rolling Stone* (November 2<sup>nd</sup>, 1995), p. 30; Nuzum, *Parental Advisory*, pp. 192-195. この頃のPMRCは財政的にも非常に厳しく、影響力は1985年当時と比べて相当薄れていた。

<sup>72</sup> ラッシュ『エリートの反逆』、14頁。